

%)、BMテスト-N陽性例は34例(73.9%)であった。尿路感染の疑いのあった例は19例でこのうち10例(52.6%)は尿定量培養で $10^5/ml$ 以上。BMテスト-N陽性は3例であった。

まとめ

細菌尿簡易迅速検出法である亜硝酸塩試験の細菌学的、臨床的評価を試みた。

本法の細菌尿における陽性率は約70%程度であり、集団検診での細菌尿スクリーニングとしては、満足すべき方法とはいえない。しかし、本法陽性例は菌数 $10^5/ml$ 以上を示す頻度が極めて高く、細菌尿の可能性が大きい。尿路感染症例に、本法を用いたところ約74%に陽性となった。定量培養法で82.6%が陽性を示したとと比較すると、劣る成績ではないが、なお一そう高い陽性率が望まれる。

小児尿路感染症に関する研究

国立病院医療センター小児科 山 口 正 司
浅 野 博 雄
皿 井 靖 長
松 井 正 紀
宮 沢 広 文
脇 礼 子
坂 口 房 子
中 村 正 夫

I. UTI における尿中細菌の分離頻度と薬剤の感受性

1968年、73年、77年の3年次についての入院、外来患者の尿培養により検出された細菌の種類、薬剤の感受性を調査して年次的変遷をみた。

68年の入院患者よりの分離株数は242株で、*E. coli* 19.8%、*str. faecalis* 18.6%、*pseudomonas* 13.2%、*prot. mirifalis* 8.7%、以下 *str. epider*、*Klebsiella*、*Enterobacter*、*Serratia* の順であった。同年の外来235株では、*E. coli* が入院に比べて著明に多く60.9%、ついで *pseudomonas* 11.5%、*Klebsiella* 6.0%、*str. faecalis* 6.0%、*str. epid.* 5.5% の順であった。73年では入院538例で *E. coli* 29.2%、*pseudomonas* 22.3%、*str. faecalis* 18.8%、*Klebsiella* 15.8% で *Klebsiella* が目立った。同年の外来では、68年同様に *E. coli* が高く62.7%で第2位以下は、*pseudomonas* 8.6%、*str. faecalis* 7.1%、*Klebsiella* 6.8%、*prot. mirif* 6.8% でいずれも10%に達しなかった。77年では入院298例で、*E. coli* 32.2%、*pseudomonas* 16.4%、*Klebsiella* 13.4%、*str. faecal* 12.8%、*serratia* 5.7% で *serratia* の増加が目立った。外来では、149株の中 *E. coli* 65.8% で73年同様に第2位以下は10%以下で、*str. faecal* 6.7%、

Klebsiella 6.0%、*pseudomonas* 4.7%、*prot. vulg.* 3.4% で、*serratia* は0%となったが *prot. vulg.* の出現が目立った。

薬剤の感受性についてみると、*E. coli* については、50%以上の感受性を認めたものは、68年では、CL、KMで、73年には CL、KM (外来)、AB-PC (外来)、NA、GM、CER、77年では TC (外来)、CP、CL、KM、AB-PC、NA、GM、CER、CB-PC (外来) であった。すなわち TC 69.4%(外来)、CP 73.5% (外来)、53.1% (入院) など最近使用頻度の少ないものの感受性の増加がみられた。{() のないものは、入院、外来共感受性あり}。

Klebsiella については、73年では、SM (入院)、CP (入院)、CL、KM、GM FRM、CER (入院) が50%以上の感受性を示し、77年では外来は例数不足のため、入院のみの検討であるが、SM、TC、CL、KM、NA、GM、CER 感受性を示した。

prot. mirabilis では、少数例であるが、CP、KM、AB-PC、GM、CER などが感受性を示した。

pseudomonas では、CL、GM は感受性を示すことが多く、SM、TC は最近感受性を高めている傾向がみら

れた。

II. 膀胱穿刺尿の培養成績

採尿バッグ,あるいは中間尿培養で陽性(10⁵以上)を示しUTIを思わせた新生児2例,乳児2例,学童3例について膀胱穿刺尿との比較を行った。中間尿培養で陽性であった学童2名では膀胱穿刺尿でも陽性であった。他の5例は採尿バッグで陽性であったものであるが膀胱穿刺尿は何れも陰性を示し,採尿バッグ法ではContaminationが多いことが推定されたが尚症例を増やして検討の必要があるものと思われた。

III. 幼児集団検尿成績

保育園3施設,幼稚園1施設,検査人員337名について,早朝中間尿を持参させ,BMテストNo.3(細菌蛋白,ブドウ糖,pH),BMテストS(潜血)を用いて検

尿を行った。

尿異常児は外来に呼んで再検した。最終尿異常児は,細菌尿1名(0.3%),糖尿1名(0.3%),血尿2名(0.6%)であった。糖尿児は入院精査の結果腎性糖尿と診断,血尿の2例は外来で経過観察中である。

細菌尿症例

6才,女兒,ペーパーテストで細菌尿(卅)のため定量培養を行った。E. coli 7.8×10⁸,尿蛋白(-),尿沈渣RBC 1/3~4~12-15/1, WBC 70-80/1~10-15/1,尿細菌は3回共陽性でE. coli 10⁷⁻⁸であった。AB-PC 600mg/d,7日間使用後ps. malfophilia 2×10⁸→(-)となった。本例は自,他覚的所見ともに認めなかったが,CRP(+)IVT正常,尿中LDH総活性量37mV/ml,TypeV 0%で下部VTIを思わせた。

業 績 報 告

新潟県立吉田病院小児科 吉 住 昭
高 田 恒 郎
谷 沢 隆 邦
常 山 佐 世子
柳 原 俊 雄

1) IVP像にみられた尿路異常について(表1)

51年4月から53年6月末の間に入院した腎尿路疾病の患者について,IVP実施者中の尿路異常の見られた頻度は9.2%である(表2)。

同じ期間内の外来におけるIVP尿路異常の頻度は,14.0%であり,両者併せて,22例の患者がみられた(表3)。

この22例の患者の病型分類は,発育不全腎5例,うち

両側性3例,偏側性1例,あとの1例は右が骨盤腎,左は無機能腎であった。

いずれも腎不全に陥っており,3例が透析中である。

大きさと数の異常が5例で,うち1例は術前診断困難な,巨大重複腎盂尿管の例であった。臍高位に達する巨大膀胱例は,両側腎とも矮小で腎不全である。

水腎症が6例で高度の2例は腎不全に陥っており,片側は無機能であった。他の4例は,尿路感染症を契機として発見された。

表 1

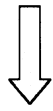
県立吉田病院小児科
(51.4.1~53.6.30)

入院患者実数	679名		
腎尿路の疾病	203名	男 121	
		女 82	
IP尿路異常	18名	男 10	8.2%
	(8.8%)	女 8	9.7%
		IP実施者	率
3ヵ月以上長期入院	149名	149名	100%
3ヵ月以内短期入院	54名	45名	83.3%
IP尿路異常頻度	18/194		9.2%

表 2

県立吉田病院小児科
(51.4.1~53.6.30)

外来IP実施者実数	50名
	男 23
	女 27
IP尿路異常者	7名
	男 2 (1)
	女 5 (2)
	()内は入院患者と重複
外来IP尿路異常頻度	7/50 14.0%



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



I. UTI における尿中細菌の分離頻度と薬剤の感受性

1968 年, 73 年, 77 年の 3 年次についての入院, 外来患者の尿培養により検出された細菌の種類, 薬剤の感受性を調査して年次的変遷をみた。